

お薦めの一冊

『ひとりぼっちの政一』^{まさいち}

橋本ときお 著 絶版

52年目の感想文

会員 保高 睦美 (69期)

「お薦めの一冊」というタイトルではあるが、1972年度青少年読書感想文コンクールの課題図書（小学校）だったこの本は、絶版になっており、今、読むことは難しい。それでも紹介したいと思ったのは、ここで描かれる少数者に対する偏見や差別は52年たった現在も続く問題だと思ったからである。

突然、特殊学級に

小学6年生の新学期、政一は突然、校長先生から新設の特殊学級（現在の特別支援学級）に入ることを告げられた。

政一に障害はない。父母のいない政一を引き取った親戚の“ばあちゃん”が政一を問題児扱いし、「直してもらうために」特殊学級を希望したのだった。学校側も特殊学級を、勉強のできない「悪い子」を直すところだと考えている。これが、当時、現役の教師であった作者の体験に基づくものなのかはわからないが、その設定自体は特に問題視されてはいなかったようだ。

いい子ってなんや

5年生までの友達は特殊学級の政一と口をきかなくなる。普通学級に戻りたいという政一に担任の先生は「いい子になれ」という。「いい子ってなんや」という問いに先生もはっきり答えられない。

大雨で集団下校するとき、政一は集団を離れ、足が不自由な子の手を引いて家まで送っていった。いい子だと思う。なのに、優等生の班長は、みんなに迷惑をかけたと政一を怒った。

夏休み。サザエ採りのコツを教える政一の周りに同級生が集まり、これで皆との仲が戻ったと期待するが、学校が始まればまた相手にされなくなる。

ひとりぼっちの政一の寂しさや辛さが、能登の四季の風物の中で描かれる。

ひとりぼっちじゃなくなった政一

「しゃばには、どうにもならんこともあるもんや」とばあちゃんが言う中、政一は、入院費が払えない同級生のために、町の病院に入院を頼みに行く。それをきっかけに同級生は無償で手術ができるようになり、大人たちは政一を「いい子だ」とほめた。普通学級の生徒も政一を無視しなくなった。

卒業式の日、式場に広がった拍手のうずの中、卒業証書を頭上に掲げる政一の目には涙が光っていた。政一は、ひとりぼっちではなくなったのだ。

めでたしめでたしでは終わらない

しかし、話はそこで終わらない。なんと作者は「おわりに」として、後日談を用意していた。数年後、職場を訪ねた作者に、政一は「あのときのことは、わすれてしまいたい」と絞り出すように答える。特殊学級出身者に対する世間の偏見が、政一を苦しめ続けていたのだ。

「どうにもならんこと」では済まされない

昨年、旧優生保護法国家賠償訴訟の原告の一人である北三郎さん（仮名）の話を聞く機会があった。北さんに障害はなかったが、問題行動があったとして教護院（現在の児童自立支援施設）に入所中、何も知らされないまま手術をされた。とつとつと訴える北さんと政一の姿が重なって見えた。

そして、今年7月、最高裁大法廷判決で、被害者救済に向けて大きく動き出した。やはり、何とかなるものなのだ。関係者の熱意と努力と長い時間が必要ではあるが——と書いたところで、待てよと思う。

裁判では、原告の多くが差別を恐れ、実名や顔を隠して戦わざるを得ず、それは現在も続いている。

「しゃばには、どうにもならんこともあるもんや」で終わらせてはならない。